

Atherosclerosis V  
Proceeding of the Fifth International  
Symposium

A. M. Gotto, L. C. Smith, B. Allen  
Spring Verlag 1979

本書は副題にも示されているように、1979年11月、米国ヒューストンで開かれた国際動脈硬化学会のワークショップを中心に28テーマ、156編が843頁に収録されている。テーマを頁順に大きく分けると、動脈硬化症の外科：冠動脈をバイパス術を中心にその効果について述べられている。

動脈硬化症の疫学：冠動脈硬化症の発生と危険因子を中心に述べられている。

高脂血症の薬物療法：薬物によるリポ蛋白への効果を中心に述べられている。

動脈壁：動脈壁の機能、単核球の貪食、血小板との相互作用。プロスタグランジン、リポ蛋白の代謝その他について述べられている。

リポ蛋白の代謝：リポ蛋白の構造と機能、代謝、リポ蛋白の機能と役割、その測定法などについて述べられている。

動脈硬化症の予防、食事療法：食事構成々分と動脈硬化症の発症とのかかわりについて述べられている。

小児の動脈硬化危険因子：疫学、リポ蛋白、遺伝の役割について述べられている。

高血圧：疫学、治療効果、更に実験的高血圧における内皮細胞の研究などが述べられている。

動脈硬化の退縮：動物実験における動脈壁の退縮変化、更に臨床的観察などについて述べられている。

この他にも様々な方面からの研究が集録されている。

欧米諸国は勿論のこと、我国でも動脈硬化性疾患の死亡率は第一位を占めている。この疾患を克服することはガンを征服するに等しく人類に計りしれない福音ともたらずものである。現在まで膨大な研究がなされ、進歩して来たことは事実としても必ずしも満足すべき臨床的效果は得られていないといえるかもしれない。本症は極めて多彩な病因により形成されていくことから、この疾患の研究にたづさわる人々も又広い分野に及ぶのである。私達はこの研究がいかなる方向を模索しているかを容易に把握出来ない。

編者の一人である Gotto 教授が「まえがき」で述べているように「この本はシンポジウムでの最も重要なあるいは最も意義ある業績を取り出すことではなく、3年前に開かれたシンポジウム以来の偉大な研究の進歩や、その方向性を示すために討論された主題についてその特色を示すことに目的がおかれている」という一節にもみられるように、本書は教科書とか解説書とかいう性格ではなく、この分野の研究にたづさわる人々にとって最も新しい情報と方向性を得るのに最も役立つものといえる。しかしながら収録が多岐にわたっており引用文献の新しいことから、専門分野の術語の解説を必要としない項目は新しい知識と理解を得るのに容易に役立ち得るものと思われる。

近年の学問の急速な進歩から考えるとある分野、特にリポ蛋白代謝やプロスタグランジンに関する情報は、昨日、今日の現状から本書に述べられていることは必ずしも先端的情報とはいえない。これはこのような性格をもつ書物の宿命であるかもしれない。

多岐にわたるこの研究の進歩をこれだけにまとめていることは高く評価されてよいと思われる。

(齊藤 康)

[千葉医学, 57, 174, 1981]